

毎年12月は、鍼関係の会の機関誌『いやしの道』を編集するのを手伝っているのだから忙しい。今号は編集後記にこう書いた。

「ラスト・サムライ」という映画を観た。昨年の課題図書であった『日本の弓術』を思い出した。明治初め、西洋文化を取り入れ急激な近代化が行われた。その中で失われようとしている武士道を描いたものだ。銃器を使った戦闘を指導する為に日本に来たアメリカ人の主人公は、武士道を守ろうとする勢力の村で異文化体験をする。「興味深い人々だ。朝目覚めた時から、それぞれが献身的にそれぞれの勤めをはげむ」。剣の訓練では「刀を気にして、周りを気にして、考え過ぎです」と言われる。その勢力は近代的な銃器によって壊滅させられるが、武士道精神は負けなかった。フィクションだが、最後で、青年・明治天皇は、武士道を守ろうとした勢力を壊滅させた、近代化推進の中心人物に逆らった。「この国の歴史と伝統を忘れてはならない」と言っている。

私たちは「日本のいやしの道」を修行している。この映画の武士道は「日本的な道」の代表として描かれているのである。私たちが修行している古方的な鍼灸・湯液は、中国から伝わったものを日本的に発展させた、日本の伝統である。そこには「日本的な道」の精神が入っている。

「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」。教育基本法が改正され、入れられた条文である。高校の卒業式で国歌斉唱に協力しなかった教員が処分された事件があった。伝統は強制されて守られるものではない。また、単に形としての国歌でもない。

西洋医学に染まった現代人が私たちのもとを訪れる。私たちは、現代人にとって当に異文化である鍼灸・湯液を行う。そこで「日本的な道」を感じさせる様な体験をもたらすことで、日本の伝統、そして「日本的な道」を広めていく。『いやしの道』もその一助となるだろう。

この映画を、天皇に忠誠を尽くし、その臣民としての勤めを果たす精神性を賛美したも

のと誤解してはならない。今の時代に当てはめれば、前宮崎県知事など私利私欲に走る現代人と違い、民主主義的な価値観の下、自らの本来の職務を淡々と果たす精神性である。

「日本的な道」とは、そうした役割を含めた物事に一体化する精神性、言い換えれば心身一如の実現を物事の中で果たし、そうすることで、物事を高度なものとすると同時に自らの精神性を高めるものである。

『日本の弓術』には大正末期に来日したドイツ人哲学者ヘリゲルが弓術を修行した体験が書かれている。そこでヘリゲルは「日本人は弓を射ることを一種のスポーツと解しているのではない。初めは変に聞こえるかもしれないが、徹頭徹尾、精神的な経過と考えている。」と言っている。

「日本的な道」の精神によって、弓術は弓道、剣術は剣道、柔術は柔道、茶の湯は茶道という様に、物事は「道」と高められているのである。鍼もまたそうであり、江戸時代には『鍼道発秘』や『鍼道秘訣集』という書物も出ている。

古典が単に古い書物でなく、現代にも通じる真実が書かれた書物という意味である様に、伝統もまた単に古い文化・事物を指すわけではない。民主主義と相容れない内容の国歌は、伝統とは言えない。伝統という名の下に単に古い事物が強制されて、歴史的に獲得されて来た個人の主体性が踏みじられてはいけない。個人の主体性の下、真の伝統は受け継がれていくのである。真の伝統は郷(くに)に繋がる。郷とは風土であって、国家ではない。風土とはその土地の自然とその自然が育んだ文化の底辺である。

私は西洋医学的な鍼ではなく、日本の風土が育んだ伝統的な鍼を行っている。自然の真実を深く感じ、私自身のあり方が問われる道としての鍼である。(2007年2月雨水)